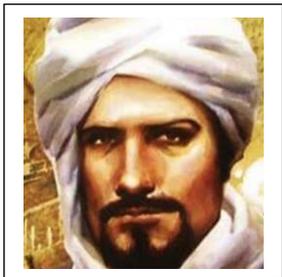


# 世界で最も長い距離を旅行した人 イブン・パットゥータ

その距離 28年間 推定：12万キロ

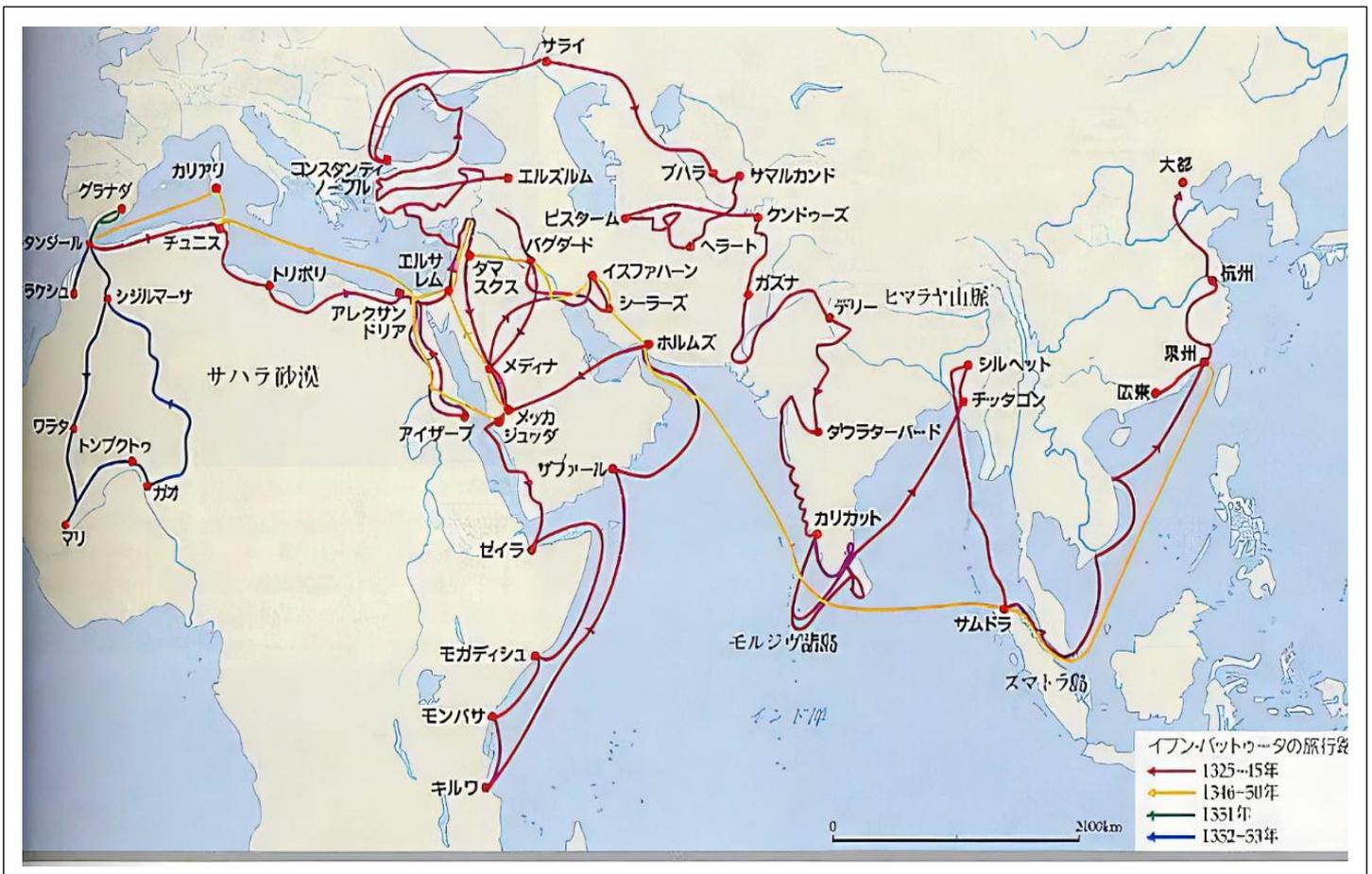
八柳 修之

記録がある世界で最も長い距離を旅行した人、誰もが思いつくのはマルコポーロ（1254年～1324年）。その著「東方見聞録」があるが、旅行した距離は15,000 kmとされる。さらに最も長い距離を旅行した人にモロッコのイブン・パットゥータ（1304～1368）がいる。その著「三大大陸周遊記」によれば、21才の時、メッカに巡礼し、その後、中東、西アジア、インド、東南アジア、中国、北アフリカへと44の異なる地域、国々、当時のイスラム圏を旅した。一部地域へは行かなかったのではないかと疑問視する識者もいるが、その距離は28年間で推定75,000マイル、約12万 km とされる。その記録「三大大陸周遊記」は東洋文庫から4巻出版されているが、その要約本、「三大大陸周遊記抄」前嶋信次訳、中央公論社がある。手持ちの帝国書院「基本地図」にない所もあるが脳活のため苦戦して要約してみた。



イブン・パットゥータは1304年、モロッコのタンジール（ジブラルタル海峡に面した港町）、のウラマー（イスラム法学者）の子として生まれた。当時、モロッコ一帯を支配していたのはベルベル人のマリー朝（ベルベル人はもともと北アフリカの遊牧民でアラブ化したイスラム教に改宗）であった。その偉大な記録「三大大陸周遊記」は東洋文庫から4巻出版されているが、その要約本、「三大大陸周遊記抄」前嶋信次訳、中央公論社がある。

1325年 6月14日、22歳のときイスラム教の聖地メッカ巡礼に出発。聖地巡礼を果たしたものはハッジと呼ばれイスラム社会では尊敬される。旅たちにあたって「父母とも在世中であつたが、心を鬼にして暇ごいをした。この悲しみは、両親にとつても、私にとつても終生癒えぬ病となつた」と。以後、30年かけてモロッコに戻った彼は、マリー朝の君主の命令で旅の記録を提出するよう命ぜられ、イブン・ジュサイに口述筆記させ「世界三大周遊記」を後世に残した。イブン・パットゥータの旅は、エジプト、シリア、聖地メッカ、アラビア半島から南の東アフリカ諸国、イラン、イラク支配したイルハン国、北インドのトゥグル朝、東南アジアや中国、サハラ砂漠のアフリカなど広範囲に及んだ。（下図参照 出典：Wikipedia、以下写真はすべてWikipedia 無料画像）



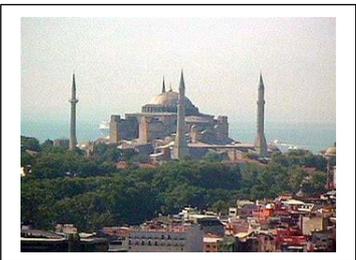


**1326年 23歳**、チェニス王の使節団に加わる。聖地巡礼団の引率者に選ばれ、カーギー（法官）に推される。4月5日、アレクサンドリア着。東洋と西洋の境、珠玉のごとく輝いている都市であった。ここで賢者に出会い、賢者は「汝は世界を旅する大旅行家になるであろう」と予言する。そして遙かなる国々まで行って見たいという気になった。カイロには一か月ほど滞在。シリア経由で聖地メッカへ。巡礼を果たしハッジの称号を受ける。（写真：アレクサンドリア大灯台 134m）



**1327年 24歳**、メッカで1か月過ごした後、イラク、イランに向かう。イラクは第4大カリフであるアリーの廟があるナジャフを訪れる。その後6ヶ月かけてペルシア各地を巡る。ペルシアではイスファハーンやシーラーズ等を訪れペルシア周遊を終えバクダードに到着。町にはモンゴルによって破壊された跡が残っていた。その後、北へと向かい、イルハン国の都タブリーズに到着。タブリーズはシルクロード交易の要塞で繁栄していた。（写真：メッカのカーバ神殿）

**1328年 25歳**、1328年頃アラビア半島の南にある東アフリカに向けて出発。アフリカの角とソマリアを經由しモガディシオに到着。さらに南下しキルワ（タンザニア）に到着。黒人達の国々を見聞したのち季節風に乗ってアラビア半島のメッカに戻り大祭に参加。1329年、26歳、メッカ滞在、大祭に参加。



**1330年 27歳**、北インドのデリー周辺を支配していたイスラム朝のトゥグルク朝を目指してメッカを出発。インドへ直行するコースをとらず小アジアから黒海沿岸を巡る遠周りのルート。エジプトのカイロ、現在のイスラエル、レバノンを経て小アジアを横断して黒海北岸のシノベからクリミヤ半島のアゾフに到着、この地域を支配していたキプチャク・ハン国のウズベキスハンに一時仕えた。この間、コンスタンチノーブル（イスタンブール）を訪問した。（写真：コンスタンチノーブル）

**1333年 30歳**、中央アジアからインドに向けて旅たち、9月、インド国王の領土インダス川河畔に到着。ハッジの称号を持っていたのでトゥグル朝に登用された。31～37歳、6年間、デリーで法官としてムハンマド・イブン・トゥグルク王に仕える。38歳のとき主君である国王スルタンデリー国王の不興を買い、インドからの出国は認められず、法官を辞して蟄居生活を送った。**1342年 39歳**、春、元の使者が到達した機会をとらえて中国行きの使者を買って出てインドを出国、7月デリーを出発。



**1343年 40歳**、インドの西南近海で海賊に襲われ身ぐるみを剥がされる。夏ごろモルジブ群島に向かう。モルジブは女王の国、法官として登用される。島民はイスラムであるが女性は顔を覆うことなく下半身は腰蓑の風俗をやめさせようとしたが厳格なイスラムの教えが嫌われる。通貨は宝貝であった。

**1344年 41歳**、8月22日、モルジブ群島を去り、セイロン、コロマンデル海岸に至る。モルジブ再訪。43日の航海のちベンガルに着きアッサムに行く。ベンガルは広大で米の産地。世界中で一番物価が安い、湿気が多く、ペルシャの人々は「財宝に満ちた地獄」と呼んでいる。（写真：モルジブ）



**1345年 42歳**、ようやく東南アジアへ向かう。スマトラ島に到着。スマトラ島はイスラム勢力に東の果て、スマトラからマレー半島を経てベトナムに入る。そして中国南部の泉州の港に入る。泉州はザイトンとも呼ばれイスラム世界にも知られて

いた港で、元の統治下にあった。泉州在住のイスラム商人達は遠方から遙々やってきたイブンパットを昼夜宴会で歓迎する。その後、広東、杭州から運河を北上し元の都大都（北京）に到着。

（写真：泉州）

1346年 43歳、泉州から船で南海経由、インドに帰る。（途中の記録がない）

1347年 44歳、4月インドを去り、フルムズ、シラーラズ等を歴遊。



1348年 45歳、1月、バクダート。6月、アレppoに至り、ガッサにペストが起こり毎日の死者が1万人にも及ぶという報があった。エジプトに入りカイロでは一日21,000人も死者がありかって親しんだ長老達は亡くなっていた。11月にメッカに入った。（写真：円形都市 バグダード）

1349年 46歳、2～3月、メッカの大祭に列し、4～5月、カイロに戻り帰郷の決意を固めた。5月末ガベス滞在、途中、母親がペストで死んだという知らせを受けた。11月13日、フェズに着く。

1350年 47歳、故郷タンジールに戻り母親の墓に詣でる。そこで何か月か暮らしたが3カ月は病気した。



1351年 48歳、異教徒に対するジハード（聖戦）に加わろうと対岸のスペインから、イスラム教徒にとって屈指の要地であるロンダ、マラーガを経てグラナダ王国を訪ねる。世界でもたぐいなくよい土地、花園、果樹園、ブドウ畑など八方からグラナダを取り囲んでいた。数か月滞在。

（写真：グラナダのアルハンブラ宮殿）



1352年 49歳、2月、北アフリカのシジルマーサを出発し、サハラ奥地に向かう。6月、黒人の王都、マールリー王国（マリ）に着く。黒人の王、けちな人物で4か月待たされ謁見。驚いたことに国王の前に出るとき、女王をはじめ女性はすべて裸体となることである。ここに8ヶ月余り滞在。

1353年 50歳、2月、マリ出発。ニジェール川流域トンブクトゥで初めてカバを見る。9月ダッカダー、12月、シジルマーサよりフェズに向かう。

1354年 51歳、フェズに住む。（写真：トンブクトゥ）

1355年 52歳、12月13日、旅行記の口述を終わる。イブン・パットウータは四半世紀にわたる長旅の間に、難破によって持ち物のすべてを失ったり、山賊や海賊にため略奪されたりで、故郷モロッコに戻ったときは旅行中のメモなどは殆ど失っていた。

1356年 53歳、2, 3月頃、イブン・ジュザイによる旅行記の整理終わる。

三大陸周遊記を検証した英国のハミルトン・ホップ教授はイブンパットの記憶には2年位のギャップがあるのではないかとしている。

1368年 65歳、この年または翌年死亡したとの説もある。

1377年 74歳、モロッコのとある都市で死亡（あるいはその翌年）、晩年はそのの法官であった。

以上